



花

久保田義夫

高校教師藤井は朝のホーム・ルームで、みんなに日ごろ考えていることをしゃべってもらうことにした。時間は十分しかない。今までは、その日の行事や注意事項の伝達に終ってしまいがちだった。

この提案に、生徒たちははかめつ面一つしなかった。入学して二ヶ月経ったばかりである。それに入学して来る生徒は年々真面目になって行くようであった。翌朝、出席番号一番の赤星という生徒は、長身をくねくねと浮遊させながら、みんなの前に立った。顔の表情だけが硬い。

ところが次の朝も、「花を持って来て下さい。」
そして次の朝も、「誰か花を持って来て下さい。」
花のことばかりだ。もっと人生に相わたる意見があってもいいのではないか。しかし、文句を言えば、生徒の自由な発言を阻害することになるだろう、と藤井は思った。
一週間が過ぎ、二週間にさしかかった。事態は変らなかつた。立つ生徒、立つ生徒、みんな、「花を持って来て下さい。」
ふざけているのなら話がわかる。ストライキ式の申し合わせでも話はわかる。そうではなくて、みんな大真面目なのだ。ただ、英語のセンテンスを必死に覚えて来て、それをみんなの前に披露しているような感じがあった。感情がどこにあるかわからない。
と言うのも、誰も花を持って来る者はいなかったし、そんなに花が欲しいのならそう言う御当人が持って来ればいいのである。
元来、花なら女の生徒がよく持つて来る。ある朝、教室へはいると、バケツ二杯に花が一杯輝いていた。バラ、グラジオラス、蘭、柳の枝。「ああ、花を持って来てくれたんですか」と藤井はニコニコして言った。みんなが変な声で笑った。「ああ、生花クラブの材料か。」女の生徒はすまなさそうに笑った。

村の「古事記」をつくるもの

福山嘉直

村には、幾人かのお年寄りがいる。七〇才、八〇才、九〇才という老年で皆元気だ。甚だ健康である。あの時は、こうだった。彼処はこうだった、といういろいろのことを話して下さる。本を読んで知ったり、またぎきして知ったりするより、老人より直接聞き、昔のことがらを知る、ということ、は、現実的で、じかに心にふれてくる。現在生きている私たちにとって老人の存在は、大いに意義があることである。

これは、ひとえに、この老人たちが、村に生を受けてから、村で成人し、村で生活し、村で老いていったからにはかならない。
ところが、現在、村には、この老人たちと、一家を支えている壮年たちと、中

学、高校に通っている少年たちと、赤ん坊のほかに「若者」は少ない。
中学卒業、高校卒業の年令の者がいないということになる。中学卒業者は、県外就職で村を出ていってしまう傾向にあるからである。
毎年毎年、中学卒業者は、村を出ていってしまう。そして彼らは、町に住みついて帰らない。壮年者は、毎年毎年、老年者に近づいてゆく。中学卒業者は、村を出てゆく——ということになれば、五年後、十年後、五十年後、村は、どうなるだろうか——と、気がかりになってくる。

大たい、農家は、親から子、孫へと、引継がれてきたものである。それなのに後をつぐべき子が、県外就職に出て、そのまま帰らない、となると、親たちの心配は、ただごとではないということになる。

平坦地では、大農式の農法がやれても山間地の田畑は、そうはいかない。
村を出ていった中学卒業生たちが、数年後帰村すれば、話はべつである。が、一度村を出ていった若人たちは、もはや帰ってこないような気がする。
若い人たちは、村を出て行って、再び帰ってこないといすれば、五十年後の村を憂うるのは農家の人だけではない。村で育ち、村で老いてゆく人たちがいなくなる。あの時はこうだった、あの岩は、こうしてできたのだ。あの川は、昔、こう

地咲きの花の季節

日隈歌南

だったんだ……と、村の歴史を、語ってくれるものがいなくなることになる。伝承の古事が、ぶつりと、たたれることになる。
人はかわり、山河は残っても、古事がたれる。これは、淋しいことだ。
若い人たちよ、君たちの「青雲の志」はわかるが「村」にも村のよさがあるものである。それに伝統に支えられたよさである。村の中で成人し、大人になり、今、生きていく御老人たちから、いろいろのことをきき、聞いたことがらを、子供たちに伝えてほしい、と思う。
村の歴史を活字として遺すことができないうらば、「古事記」のように、口で伝えて、子孫へ遺してもらいたいような気がする。

私は月曜日が好き、今まで月曜も日曜もあらばこそ。全く年中無休状態のお花のけいこ日を、この二月末から思った急性肝炎が、ありがたい事にすっかり快くなつて病因の過労をこれからも避けるため、日曜を私の完全な休日にして仕舞ったので、月曜日は新鮮な気持ちで花鉢が握れる。
今の時季は温室咲きの切り花が絶えて季節を地で咲く花と向き合せてそれぞれの花との応待も気骨が折れず親しみやすい。近頃のお嬢さん方もそう。お行儀よくしなればとか、ていねいに言葉には気をつけなければとかの取って付けがなくて、夏は薄着の気楽さが動作もてきばきと、自然言葉もそれにもなつてお互いの花鉢も音が冴える。
風が入る方向に皆がそろって窓を開いているように夏のお花教室はたのしい。けいこ年数を積んだ人は何時のまにか新しく始めた方達にとつて良い手本を示す花も生けるけれども、花以外の事も言葉なく範を示してくれる。ときどき捨てられた生け屑の中に明日か明後日は咲きそうなつぼみが交っていると、それをいと

ほしみながら拾っている人を見て私はほっとする。
——生けるまではお花はそれこそだいたいじだいにして居て、生けにかかったら本当に思いきりよく要らないものはいっさい要らない。そんな積りで生け上げたから今度はこの生けられたものにはどの一本も必要です。という作品にして下さいな——
私の言葉で要らなくて切り捨てられた屑なのに
——此のつぼみはじきに咲きますからお持帰りになって、一輪さしかコップにでもさして置いて下さいな——
とつけ加えることを幾人かにはやはり言い忘れて仕舞う。
役に立てた花以外を捨てるのには割に若い人に多い。それだけに抽象的ないけばなになると思いきりがいいもので花や枝の持つ風情にはとっおいつしないで、技術は不十分なが智で片付けた開放的な活気に充ちた作品がよく出来る。出来上つたそれらのいけばなを眺めながら私は、ジャズのリズムを感じたり、キャンブファイヤーを囲む若人達のよろこびと、どよめきを感じたりしながら、私の批評を待つ作者のかけのないほほ笑みに拍車をかけておいて私はこころたのしくなる。

最近では折角始めたものだから、職とも出来る日のために身につけて置きたいと心の心がけの良さで、結婚後もずっと続ける方式が多いのはうれいこと、それだけでなくも新婚のよろこびと希望の部屋にお花が飾られたら、いっそう新鮮さが溢れるにちがいない。花包みをだいに抱いて帰るしあわせそうな若いお嬢さんの後姿を私は祝福の視線で見送る。
これもやはり前にはあまり見かけなかつたことで、みごもつたら大事をとることと御自身のはにかみで、巣ごもりの小鳥のようにあまり外出もしなかつたらしいけれども、今の若い方々は平気らしく胸張っておなかを張って、ヒップを張っての見事なお出ましに私は頭が下がる。そんな様子も何気なさそうにお花を生けながら
——胎教のつもりで——
とのけなげなその胸の中に誇りと、小さないのちをはぐくむ母性の偉大さを知らされながら、ついこころまで花鉢の音の冴えに豊かな気持ちになり、ほほ笑むとともに丈夫な可愛い赤ちゃんが生まれます様にと念じたくなり
向日葵の様な坊やだつたらいいな
ダリヤの様な女の子だつたらいいな
夏を思いっきり大きく咲く花の様にたくましい赤ちゃんが想像出来る夏の私の教場風景。

だが、中学を卒業しても、少しは進んで村に止まってももらいたいと思う。これは、自分の村のことを言っているわけではない。一般的に「村」に残ってほしい、という意味である。
「村」に生を受けた若者よ、「村」の御老人となつてくれないか。

（作家）

（華道家）

（華道家）